

ファッションの力で環境は守れるのか

社会学部 4 年 三 根 瞳

<目次>

- I. はじめに
 - II. ファッションが環境に与える影響
 - (1) 様々な製品のデザインから出荷までの環境への影響
 - (2) 繊維製品の環境負荷
 - (3) 繊維が作られるまでの環境への影響
 - III. エコファッションとグリーンファッションの違い
 - (1) エコファッションとは
 - (2) グリーンファッションとは
 - IV. グリーンファッション
 - (1) グリーンファッションが注目されはじめた理由
 - (2) グリーンファッションの広がり
 - V. 従来のファッションとグリーンファッションの比較
 - (1) 繊維の違いによって、どのくらい環境に与える影響が違うのか
 - (2) 従来のファッションとグリーンファッションではどのくらい影響が違うのか
 - VI. まとめ
- 参考文献

I. はじめに

現在、私たちが着ている服の多くは、寒さや熱から身を守るといった人間の基本的欲求としての衣服ではなく、楽しむためのファッションである。いまや、私たちにとって、ファッションはなくてはならない存在となっている。

しかし、ファッションは楽しい反面、環境や社会に多大な影響を与えている。衣類の素材を栽培・製造する際に、大量の水や農薬、殺虫剤、化学薬品、エネルギー、労働力を必要とする。そして、生産された服や小物は大量の排気ガスを排出しながら世界各地に輸出されている。なにより、ファッション

にはシーズン毎のトレンドがあるため、半年毎に、世界中で膨大な量の服や小物が作られ、トレンドが終われば、売れ残った商品は処分されていく。この時、処分される膨大な量の服は、焼却され大気を汚染する。また、焼却されず埋め立てられれば、生産時に使用された化学薬品が地中や川、海に流れ出し、私たちが食べる農作物や魚介類を汚染するのである。

環境問題に対する意識が高まる中、環境に優しいファッションとしてエコファッションが登場した。エコファッションは、日本にも存在しているが、オーガニック・ナチュラル素材を使用した服はどことなくシルエットが良くないとして、あまり受け入れられなかった。このことから、エコとファッションは両立しないとされていた。

そこで、エコとファッションは両立しないという定説を打ち破るべく生まれたのが、グリーンファッションである。グリーンファッションとは、デザイン性を妥協することなく、普通の服と比較して何ら遜色のない、おしゃれだが環境や社会に配慮した服や小物のことをいう¹⁾。

グリーンファッションは、2005年にアメリカでハイファッション小売として地位を確立しているバーニーズが提唱したことにより広まった。ファッションショーで、ニューヨークを代表するデザイナーたちがグリーンファッションのアイテムを展示し、一般消費者がその存在を知るきっかけとなった。こうした動きにより、アメリカではグリーンファッションが定着しつつある。これを受けて、多くのファッション企業が社会における企業の責任を考え、環境・社会問題に取り組み始めており、グリーンファッションを浸透させようとする動きが日本でも見られてきている。現状では、まだ従来のファッションが占める割合の方が大きいですが、近い将来グリーンファッションが主流になる時代がやってくるかもしれない²⁾。

本研究では、ファッションが環境に与える影響を明確にし、従来のファッションとグリーンファッションを比較しながら、どれくらいグリーンファッションが環境に優しいものなのかということを、既存の統計資料を参考に導きだしていく。そして、その結果などを基に、ファッションは環境問題の解

決に貢献できるかを明らかにしていくことを目的とする。

II. ファッションが環境に与える影響

ファッションとは私たちにとって今や楽しみのひとつとなった。しかし、どのくらい環境や社会に影響を与えているのかを考えながらファッションを楽しんでいる人はあまりいないだろう。一体、私たちの身近にあるファッションはどのように環境に悪影響を与えているのだろうか。

そこで、第II章ではファッションが環境に与える影響を明らかにしていきたいと思う。

(1) 様々な製品のデザインから出荷までの環境への影響

はじめに、私たちの身近にある製品が製造されて出荷されるまでにどのくらい環境に影響を与えているのかを見ていく。ここで参考にするのは、グリーンファッションの第一人者でもあり、ファッションにおける環境対策の先端を突き進むブランド、「パタゴニア」である。「パタゴニア」は、ビジネスを行ううえで100% サステイナブルであるのは不可能であることを認識し、だからこそ、環境への悪影響を最小限にとどめるべく努力を日々行っている。そんな同社の商品が、デザインされてからディストリビューターの下に届けられるまで、どのような環境への影響があるかを発表したのが、「フットプリントクロニクル」である³⁾。ここでは、この資料を基に良く着られている5点に絞って紹介することにする。

表1からも分かるように、繊維から製品として出荷されるまでに、様々な環境負荷がかかっているのである。しかし、ここで注意しておきたいのは、「パタゴニア」が扱っているのは、環境負荷が少ないように作られている製品であるということだ。したがって、私たちの身の回りの製品は、これよりももう少し環境負荷が高いものであると言える。

表1 環境負荷^{※1}



| | ピマ・コットン・シャツ | ダウン・セーター | Tシャツ | ポロ・シャツ | オーガニック・コットン・ジーンズ |
|----------|--|---|--|--|---|
| エネルギー消費量 | 42MJ (11.5 k w時) ・27日間 ^{※2} | 34MJ (9.4 k w時) ・22日間 ^{※2} | 43MJ (12 k w時) ・27日間 ^{※2} | 49MJ (13.5 k w時) ・31日間 ^{※2} | 176MJ (49 k w時) ・113日間 ^{※2} |
| 移動距離 | 17,703 km ・イタリアのトッスカーニアからルイジアナ州エンパイアを往復 ^{※3} | 33,080 km ・モンゴルのウランバートルからブラジルのサンパウロを往復 ^{※3} | 25,130 km ・ワシントンDCからケニアのモンサバを往復 ^{※3} | 17,703 km ・イタリアのトッスカーニアからルイジアナ州エンパイアを往復 ^{※3} | 16,206 km ・フランスのアヌシーとベネズエラのサンクリストバルを往復 ^{※3} |
| 二酸化炭素排出量 | 約 8 kg ・約 30倍 ^{※4} | 約 3 kg ・約 9倍 ^{※4} | 約 4.7 kg ・約 22倍 ^{※4} | 約 9.3 kg ・約 30倍 ^{※4} | 約 40 kg ・約 60倍 ^{※4} |
| 廃棄物 | 794 g ・約 3倍 ^{※5} | 142 g ・約半分 ^{※5} | 148 g ・約 3分の2 ^{※5} | 907 g ・約 3倍 ^{※5} | 2.4 kg ・約 4倍 ^{※5} |
| 水使用量 | 2,304ℓ ・768人分 ^{※6} | — | 703ℓ ・243人分 ^{※6} | 2,668ℓ ・889人分 ^{※6} | 180ℓ ・60人分 ^{※6} |

- ※1 繊維の段階から製品としてバタゴニアのリノ配送センターに届くまでにかかる影響。
- ※2 エネルギー消費量…18 Wの小型蛍光電球を24時間つけたままの日数で表している。
- ※3 移動距離 …国と国の往復距離で表している。
- ※4 二酸化炭素排出量…その製品の重さの約何倍かで表している。
- ※5 廃棄物 …その製品の重さの約何倍かで表している。
- ※6 水使用量 …大人1日の飲料水量で表している。(1日平均約3ℓを摂取する)

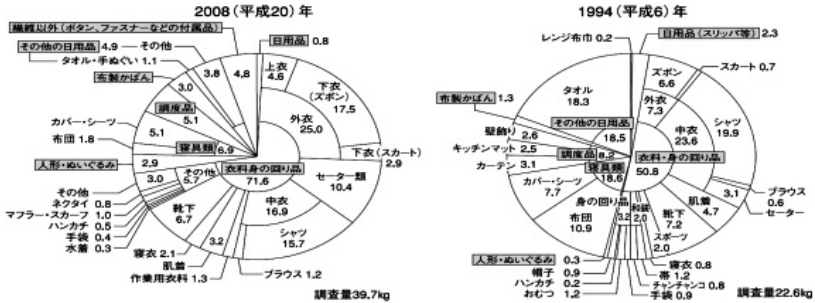
(2) 繊維製品の環境負荷

衣服は、大量生産、大量消費されているのが現状である。そこで、京都市環境政策局等が実施している「家庭ごみ細組成調査」⁴⁾の結果などをもとに、衣料品を中心とした繊維製品がもたらす環境負荷について見ていく。

わが国における繊維製品、衣料品のライフサイクルフローは経産省の調べ⁵⁾によると、1990年ベースで繊維製品の総消費量232万t、うち衣料品消費量は117万tであった。排出段階での再使用(中古衣料輸出も含む)は17万t、リサイクル(ウエス、反毛原料など)は16万tとなっている。したがって、廃棄される分が約200万tとなり、繊維製品分野の再使用、リサイクルは合わせても14.2%とまだまだ低調である。なお、日本アパレル産業協会が2000年に

アンケート調査した結果によると、家庭での衣料品保有量は約 270 点（成人女性用 113 点、成人男性用 89 点、子供用 68 点）であった。そして、一世帯あたりの衣料品の使用年数は平均約 5 年と考えられている。

図 1 繊維製品の用途別排出状況（湿重量比）



(出典:繊維製品の知られざる環境負荷 18 ページ)

次に、繊維製品がどのように捨てられているかである。これを知るためには、京都大学環境保全センターの協力を得て、家庭ごみ中の繊維製品の詳細な調査を実施している資料を参考とする (図 1)。家庭ごみ中の繊維類の占める量は 2008 年調査では、1 人 1 日あたり 13.2 g であった。そして、衣料・身の回り品が 1994 年に占める割合は 50% 程度であったが、2008 年になると 71.6% まで増加している。特に外衣やセーターなどの増加が目立っており、これは、衣服が惜しげもなく家庭ごみとして捨てられる時代になってきたことを意味している。

循環型社会においては LCA (主に個別の商品の製造、輸送、販売、使用、廃棄、再利用までの各段階における環境負荷を明らかにすること) 的視点で生産段階から環境負荷の少ない製品作りが必要であり、廃棄物の発生抑制の意味でも環境負荷の大きな製品を優先的に抑制していく必要がある。このような考え方にに基づき、繊維製品のもつ環境負荷 (製造エネルギー) を見てみる。繊維製品の製造エネルギーは、原料採取、紡績、織編、染色、縫製と多

くの工程で大量のエネルギーが使われている。アルミ缶がよく「電気の塊（かたまり）」と称され、エネルギーをたくさん使用して作られた製品の象徴的なものとして取り上げられるが、実は衣服はその何倍ものエネルギー負荷の高い製品なのである。その意味で、私たちは繊維製品が最近安く手に入ることもあって簡単に使い捨てているが、環境負荷の面では大いなる無駄である。やはり、昔のように、衣服は大切に長く使用することが大切なのだ。とはいえ、衣服はファッション性も求められるので、リペア、リメイク、古着ショップ、バザーなど再使用についても普及を図る必要がある。

なお、わが国の衣料品は点数ベースで見ると、2006年で国内産は6%で輸入品が94%を占め、圧倒的に海外製品である。海外製品は輸送エネルギーの面では国内産に較べて環境負荷をかけた製品であり、これも衣料品の知られざる環境負荷の1つと言えるだろう⁶⁾。

(3) 繊維が作られるまでの環境への影響

繊維には大きく分けて、天然繊維と化学繊維がある。天然繊維とは、コットンや麻など植物や、ウールやシルクなど動物の毛でできている繊維であり、化学繊維とは、ナイロンやポリエステル、レーヨン、アセテートなど、人工的に作られた繊維のことである。

天然繊維は自然界に存在するものだから環境にやさしく、化学繊維は人工的だから環境にやさしくない、というイメージを持っているかもしれないが、一概にそうとは限らない。

天然繊維でも、繊維市場の40%を占めるコットン（綿）は、綿花栽培の際に大量の殺虫剤や農薬が使われている⁷⁾。元々虫が付きやすい性質のため、世界の殺虫剤使用量の25%、農薬使用量の10%がコットン生産に使われているほどだ。Tシャツに換算すると、1枚で150gもの農薬を使用していることになる⁸⁾。さらに、綿花栽培には大量の水も使われており、コットン1kg（Tシャツ1枚とジーンズ1本に相当）当たり2万ℓ以上の水が必要となる⁹⁾。また、ウール（羊毛）は、羊に成長促進剤や防虫剤が投与されたり、羊の餌と

なる穀物や草に農薬や殺虫剤が使われている。そして、オーガニックコットンやオーガニックウールなどもあるが、たとえオーガニックであっても、コットンは栽培時に大量の水を必要とし、羊のゲップには気候変動の原因となるメタンが含まれており、環境にやさしいとされていても大量に栽培・飼育されれば、大きな環境負荷を生み出すことになるのだ。

一方、人工的に作られる化学繊維は、有限資源である石油を主原料としていたり、生分解できなかつたり、生産時に化学物質の使用が不可欠だったり、環境面で天然繊維より劣る点が多くある。ただし、生分解が可能な植物由来の再生繊維もあるし、生分解不可能でもリサイクルできるポリエステルやナイロン、それに、環境に配慮した染色・加工を施している化学繊維もある。こうした化学繊維は、農薬や殺虫剤、化学物質を使用する天然繊維と比べて環境にやさしいこともあるのだ¹⁰⁾。

また、廃棄された繊維製品がどのような素材でできているのかは、繊維製品の多くは焼却処理されるので、CO₂やNOXなどの排出量という環境負荷の視点からも重要である。湿重量比で見ると、2008年は天然繊維64%、化学繊維36%であるが、1994年の調査時に比べると化学繊維の比率が上昇している。特に、衣料・身の回り品に限ると化学繊維の比率は38%になっている。このように、わが国の繊維製品は石油由来の素材が多くなっているのである。

図2 繊維製品の素材別ごみの排出状況
(湿重量%)

| 繊維製品の素材 | | | 2008 | 1994 |
|---------|------|--------|-------|------|
| 化学繊維 | 合成繊維 | ポリエステル | 18.9 | 13.6 |
| | | アクリル | 5.3 | 4.0 |
| | | ポリウレタン | 2.3 | 0.7 |
| | | ナイロン | 3.6 | 5.9 |
| | | その他 | 2.1 | 1.4 |
| | 小 計 | | 32.1 | 25.6 |
| | 再生繊維 | レーヨン | 3.7 | 0.4 |
| | | キュブラ | 0.2 | 0.4 |
| | 小 計 | | 3.9 | 0.8 |
| | 中 計 | | 36.0 | 26.3 |
| 天然繊維 | 綿 | 45.7 | 66.4 | |
| | 羊毛 | 15.2 | 3.3 | |
| | 絹 | 2.6 | 2.0 | |
| | 麻 | 0.5 | 2.0 | |
| 中 計 | | 64.0 | 73.7 | |
| 合 計 | | 100.0 | 100.0 | |

(出典:繊維製品の知られざる環境負荷 19 ページ)

Ⅲ. エコファッションとグリーンファッションの違い

環境と共存できるファッションとして、最初にエコファッションが登場した。しかし、エコファッションはあまり受け入れられなかった。

そこで、次に登場したのがグリーンファッションである。グリーンファッションは、エコファッションと違い、多くの人々に受け入れられるようになっていった。この違いは何なのだろうか。

第Ⅲ章では、それを明らかにするために、エコファッションとグリーンファッションの違いについて見ていく。

(1) エコファッションとは

アメリカでは、1990年代初頭から環境や社会に配慮したファッションが市場に出てくるようになった。それは、環境と共存できるファッションとして、エコファッションと呼ばれるようになった。そしてエコファッションは、日本にも存在するようになっていった。

エコファッションとは、生成りでゆったりとした服、手作業で作られたもの、いわゆるスローライフに合うロハススタイルである。こうしたテイストを好む人々は現在でも多く、一カテゴリーとして定着している。

しかし、ハイエンドなファッション誌に掲載されるような服や小物、パリ・コレクションやニューヨーク・コレクションに登場するようなエッジーでスタイリッシュなファッションは、エコとは掛け離れたものであり、そうしたファッションを好む人にとってエコファッションは興味のないものであった。また、アメリカにはロハス文化は存在しておらず、オシヤレではないが環境にやさしいファッションを「グラノーラ」ファッションと呼び、エコ的なファッションを敬遠する傾向がある。グラノーラとは、朝食の定番であるシリアル的一种であり、栄養価が高い自然食・健康食品として知られる。栄養はあるけれど毎日食べている、なんの面白みもないものという意味でもある。

このように、環境・社会的負荷の削減を重視しファッション性をないがし

ろにしたため、一部の環境・社会問題に意識の高い人々以外にエコファッションが受け入れられることはなかったのである¹¹⁾。

(2) グリーンファッションとは

環境や社会に配慮したファッションが意識されるようになってきたが、やはりまだオシャレを楽しみたい人々が多く、エコファッションは、素材に気を使っていても、デザインを重視しなかったためにあまり受け入れられなかった。

しかし2000年代に入ると、オーガニック食品を購入することや社会問題に取り組むことがカッコイイと捉えられる風潮が生まれ、その現象はファッション業界にも飛び火した。

そして、2004年頃から、一部のデザイナーがファッション性を維持しなければエコファッションは浸透し得ないことに気付きはじめ、おしゃれで環境や社会に配慮したブランドを立ち上げるようになった。そこで登場したのがグリーンファッションである。

アメリカでは、商品ライフサイクル全体を通して、オシャレだが環境や社会に配慮したサステイナブルな手法を採用した衣服や服飾小物のことを、グリーンファッションという。現状では、いずれかの工程がサステイナブルであればグリーンと提唱されている。

そこで、各工程でどのようにファッションのサステイナブル化がされているのかを見ていく。工程とは、素材、染色・加工、製品生産、販売、使用・使用後の5工程である。

<素材>

一般に、オーガニック農法により栽培・畜産されたコットン、麻、ヘンプ、ウール、シルクなどの天然繊維、リサイクルポリエステルやリサイクルナイロンなどのリサイクル合成繊維、木材原料のリヨセルや大豆繊維などの植物

原料の反合成繊維、再生繊維などのサステイナブル素材を使って商品が作られている。

<染色・加工>

繊維製品には染色・加工が欠かせないが、同工程ではエネルギー、水、化学物質を大量に使用するため、大きな環境負荷が掛かる。しかし、ファッション性を維持する上では欠かせず、資源消費量を抑えた技術の開発や適切な廃液処理手法の導入が進められている¹²⁾。

<製品生産>

衣服の製品生産工程で行われるのは、主にデザインと縫製である。使用後のリサイクルを考慮した解体しやすいデザインや、汚れやすい部分のみ分解して洗濯できるデザインなど、デザイン工程で環境対策を行えば後工程での環境負荷が削減できる。縫製においては場所や労働管理が問題になる。輸送時のガソリン使用量やCO₂排出量の削減、労働管理の容易性といった観点から、消費地に近い場所での縫製が好まれている。企業規模が大きく価格訴求が求められる場合は途上国や新興国での縫製が不可避となるが、その場合は適正労働の認証取得や徹底した輸送効率化が必要とされる。

<販売>

販売時のサステイナブル化を実現するためには、店舗や物流センターなど建物内での省エネ、省水、リサイクル建材の採用といった環境対策、また、容器包装や什器、物流資材の効率化が求められる。

<使用・使用後>

製品使用時の環境対策は主に消費者の責任となるが、洗濯やクリーニングの効率化、感情的耐用年数（使用期間の長期化）、使用後の製品の適切な取り扱いなどがある。

使用済となったファッション製品は、自治体や企業、団体などによる回収、あるいは消費者自らの意思で古着店などに販売され、回収後は、古着として再販、途上国へ輸出、ウエスとして転売、繊維リサイクルといった方法で再利用されている。今後は、製品の処分を自治体や消費者に任せるのではなく、生産者自らが責任を持って製品を回収しリサイクルする仕組みが確立されることになるだろう¹³⁾。

図3 エコファッションの例



(出典:リンネル公式ホームページ)

図4 グリーンファッションの例



(出典:イードゥン公式ホームページ)

IV. グリーンファッション

第IV章では、グリーンファッションについてももう少し詳しく見ていくことにする。

(1) グリーンファッションが注目されはじめた理由

アメリカでグリーンファッションが広まったのは、「バーニーズ」の力によるところが大きい。「バーニーズ」とは、ハイファッション小売として地位を

確立しているブランドである。同社が、2005年2月、ニューヨーク・コレクション時に開催された「フューチャー・ファッションショー」でランウェイを飾ったサステイナブルなアイテムを、バーニーズ・ニューヨーク本店のウィンドーに展示し、グリーンを提唱し始めたのである。「フューチャー・ファッションショー」は、アースプレッジという環境保護団体がサステイナブルなファッションを浸透させるために開催したものであった。

また、「バーニーズ」はこれらの作品を展示しただけではなかった。「フューチャー・ファッションショー」のコンセプトに賛同した、同社ファッションディレクターのジュリー・ギルハート氏が、デザイナーにショーへの参加を促すなど多大な貢献をしていたのである。彼女は、現在はアースプレッジの役員を兼務し、グリーンファッションの浸透のために活躍している。

このように、彼女の貢献により、著名デザイナーがショーに参加し、グリーンファッションについて考え始めるようになった。また、「バーニーズ」のウィンドーに展示されたことにより、一般消費者の目に留まり、グリーンファッションが注目されるようになってきたのである。その結果、「フューチャー・ファッションショー」は、サステイナブルなファッションがハイエンドであり得ることを証明し、一般消費者にその存在を知らしめる大きなきっかけとなった¹⁴⁾。

(2) グリーンファッションの広がり

「バーニーズ」はその後、多くのグリーンファッションブランドを取り扱うようになった。2007年には、「ルームステイト」とのコラボレーションにより、バーニーズ限定のサステイナブルコレクション、「バーニーズ・グリーン」の展開を開始したりするなど、グリーンファッションを前面に押し出すようになっていったのである。このような動きがあり、グリーンやサステイナブルがファッションの大きなテーマとして認識されるようになっていった。

そしてもう一人、グリーンファッションを広めた人物として欠かせないのが、デニムブランドとして有名な「ローガン」のデザイナー、ローガン・グ

レゴリー氏である。彼は、2004年に、サステナブルな素材と生産方法のみで作るカジュアルブランド「ルームステイト」を立ち上げるなど、様々なサステナブルファッションに対する試みを行っている。

そして、現在では派手に宣伝はしないものの、オーガニックウールなどサステナブル素材を使い始めている高級ブランドは多く、チェーン店などでもサステナブル素材を採用し始めている。

こうした業界の著名人たちの働きかけにより、グリーンファッションは定着してきた¹⁵⁾。

V. 従来のファッションとグリーンファッションの比較

実際にグリーンファッションは、どのくらい環境にやさしいのか。第V章では、従来のファッションとグリーンファッションにどのような違いがあるのかに注目して見ていく。

(1) 繊維の違いによって、どのくらい環境に与える影響が違うのか

環境に配慮した製品を作るうえで、商品ライフサイクルの全段階においてどれだけの環境負荷が掛かっているかを調査計測することは重要である。

いくつかの団体が、繊維製品に関するアセスメントを行っているが、それぞれに目的や視点が異なるため、同じようなデータはない¹⁶⁾。そこで、従来のファッションとグリーンファッションの比較を明確にするのは難しく、ここでは簡単に比較するだけにしておきたい。

まずここで参考にしたいのは、経済産業省が行った繊維製品のアセスメントである¹⁷⁾。そして、使用する繊維によってどのくらい環境負荷の違いがあるのかを明らかにしたい。そこで、比較するのが、ポリエステル、コットン、ウールである。以下のグラフ図5～図9は、これらの繊維を使用したポリエステル100%ブラウス、コットン100%ワンピース、ウール100%スーツ、それぞれ1t分の、繊維生産から縫製終了までの製造工程における環境負荷を計

測したものである（図5～図9）。

これらの図5～図9のグラフを見て分かるように、固形廃棄物に関してのみ、コットンワンピースが最も環境負荷が高く、ポリエステルブラウスが最も低い。それ以外はウールスーツが最も高く、コットンワンピースが最も低いという結果が出ている。これらのデータを比較する際の注意点は、異なるカテゴリーの製品なので製造工程に違いがあるということ、エネルギー、CO₂など5種類のみでの環境負荷の測定であり、その他農薬や化学薬品など有害物質の影響などが考慮されていないこと、輸送、消費など生産後の環境負荷が考慮さ

図5 1t当たり消費エネルギー量 (MJ)

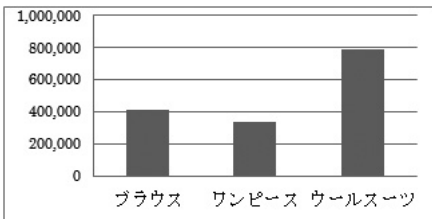


図8 1t当たり硫酸化物排出量 (kg)

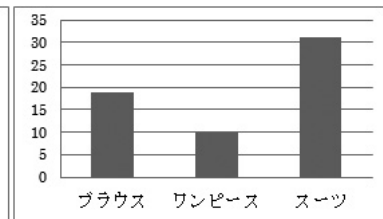


図6 1t当たりCO₂排出量

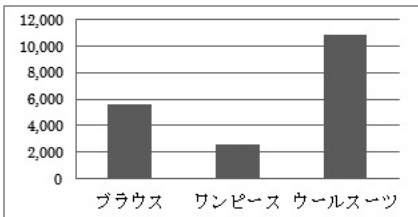


図9 1t当たり固形廃棄物排出量 (kg)

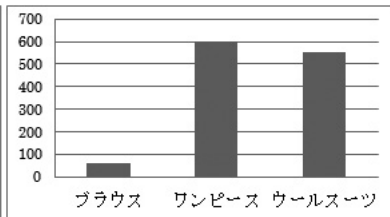
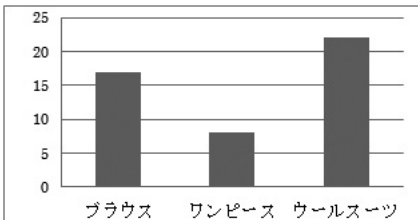


図7 1t当たり窒素酸化物排出量



(出典:繊維製品(衣料品)のLCA
調査報告書 14ページ)

れていないこと、などである¹⁸⁾。

このように、繊維の種類によって環境に与える影響は大きく変わっていくのである。

(2) 従来のファッションとグリーンファッションではどのくらい影響が違うのか

繊維の種類によって環境に与える影響が大きく違ってくことは分かったが、従来のファッションとグリーンファッションではどう違ってくるのだろうか。そこで分かりやすいように、(1) で見た繊維の種類の中からコットンを例に挙げ、コットンTシャツとオーガニックコットンTシャツでは、実際にどのような違いがあるのかを見ていきたいと思う。

図 10, 11 は、コットンTシャツとオーガニックコットンTシャツの生産工程別有毒比率を表している。生産工程別有毒比率とは、素材、生産、輸送、消費、廃棄の工程でどれくらい有毒性があるのかを比率で表したものである。ここでは、どちらも同じTシャツであり、素材だけが異なるため、生産、輸送、消費の工程で生じる有毒物質の量はほぼ同じであることを前提としておく。したがって、素材以外の工程では、有毒性の差は生じていないということになる。それを踏まえた上で、これらを比較して見ても分かるように、従来のファッションで使用されるコットンと、グリーンファッションで使用されるオーガニックコットンでは、コットン栽培時の有毒性が92% から8%にまで削減できるようになったのである¹⁹⁾。

これらの結果からも、有毒性が低いオーガニックコットンを使用しているグリーンファッションの方が、従来のファッションと比べても、環境にやさしいということが言えるのではないだろうか。

図10 コットンTシャツ

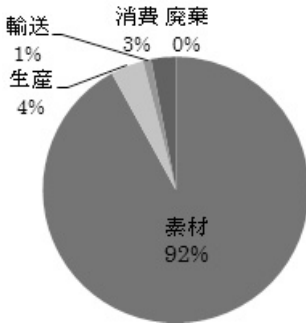
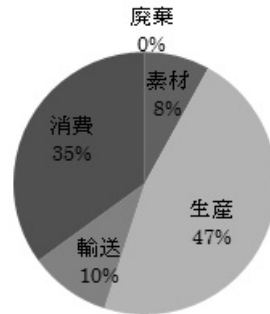


図11 オーガニックコットンTシャツ



(出典:グリーンファッション入門 178 ページ)

VI. まとめ

最後に第VI章では、第I章から第V章のこれまで見てきた結果を基に、ファッションは環境問題の解決に貢献できるのかを明らかにしていきたいと思う。

従来のファッションでは環境負荷が高く、環境問題が深刻化していくにつれて、次第にファッション製品は削減対象になっていくだろう。しかし、現代を生きる私たちにとって、ファッションは楽しいものであり、なくてはならないものとなった。その楽しみを失わないためにも、ファッション業界が今後も存続するには、グリーンファッションが特別なものでなくなり、すべてのファッションがグリーンになる以外、道はないのかもしれない。

そこで考えていきたいのは、グリーンファッションを作る、あるいは既存のブランドをグリーン化するためにはどうすればよいのだろうかということである。それには、商品のライフサイクルが関係してくる。第三章でも見たように、商品のライフサイクルの各工程の環境負荷を考えなければグリーンになり得ない。だから、これまでは素材から廃棄へと一方向へのフローでしかなかったものを、サイクル(円)として考えていくのである。そして廃棄後に切れていた輪をリサイクルやリユースにより再度素材へと結びつけ、商

品ライフサイクルの「ループ（輪）を閉じる」。このループを閉じた状態がライフサイクルの本来あるべき姿である。それぞれの段階でエネルギーや資源を回収し再利用することで、環境汚染を極限まで削減し、使用したものを循環させ廃棄物を出さない。そうすることで、ひとつの商品、あるいは業界の中で閉じられたシステムができ、外部に影響を及ぼすことなく物質が循環し続ける。それを実現することでグリーンファッションが成り立つのだ。

そこで、グリーンファッションが当たり前のもので私達の身近なものとなるために、消費者一人一人の行動も大切になってくるのである。まず心掛けていきたいのが、製造工程や廃棄過程でどれだけ環境に影響を及ぼすかを考え、物を購入するということである。服や布製品を選ぶ際には、できる限りオーガニックの天然繊維製のものを選ぶこと。また、オーガニック天然繊維だけでは難しい場合は、リサイクル繊維製や生産工程で環境に配慮したことを証明する認証マークが付いているものを選ぶこと。そして最も重要なのは、過剰に消費しないことである。なぜなら、環境にやさしい素材を使ったところで、地球に負荷を与えずに服を作ることはできない。リサイクルによる循環型経済を作り上げたとしても、リサイクル時に排出される温室効果ガスが大気を汚染するという事実から免れることはできないからである。一人一人が行動し、こうした心掛けを少しずつでもしていくことにより、社会全体がサステイナブルになり、グリーンファッションの広がりは実現可能なものとなっていくであろう。

グリーンファッションは、様々な製造過程での環境負荷を削減し、また環境にやさしい素材などを使用した製品であるので、これから先グリーンファッションが当たり前のものになっていくと、水、CO₂、農薬・殺虫剤、ごみの減少などといった様々な場面で、環境に与える影響を減らしていくことができるようになる。そういったことから、ファッションは環境問題の解決に貢献できるであろう。近い将来グリーンファッションが主流になる時代が必ずやってくると言われている。そうになると、環境問題の解決にファッションも貢献できるようになるのは、思っているよりも早く、もうすぐのことなのか

もしれない。

そしてもうひとつ、ファッションとは個人のステートメントであるということも重要である。言ってしまうえばファッションは、どんな服を着ようとも個人の自由である。だからこそ、グリーンファッションを着るということは、単に環境にやさしい服を着ているということだけでなく、その着る人個人の生き方の主張にも繋がっている。そう考えていくと、グリーンファッションは単なる服の話に留まらないのかもしれない。だからこそ、これから先、グリーンファッションが環境負荷の軽減を目指す人々の新しい結集を創り出す仕掛けになりうるのではないだろうか。

注

- 1) 田中 [2009], 8-9 ページ。
- 2) 田中 [2009], 10-11 ページ。
- 3) NY Green Fashion—パタゴニア, 生産過程での環境への影響—
- 4) 京都市環境局 [2009]。
- 5) 三菱総合研究所 [2002]。
- 6) 高月 [2011], 18-19 および 21 ページ。
- 7) NY Green Fashion—環境に優しい服の素材—
- 8) NY Green Fashion—オーガニックコットン—
- 9) 田中 [2009], 14 ページ。
- 10) NY Green Fashion—環境に優しい服の素材—
- 11) 高月 [2011], 20 ページ。
- 12) 田中 [2009], 9 ページ。
- 13) 田中 [2011], 22 ページ。
- 14) 田中 [2011], 23 ページ。
- 15) 田中 [2009], 10 ページ。
- 16) 田中 [2009], 11 ページ。
- 17) 田中 [2009], 169 ページ。
- 18) 経済産業省製造産業局繊維課 [2009]。
- 19) 田中 [2009], 172 および 178 ページ。

参考文献

- ・田中めぐみ, 『グリーンファッション入門』, 織研新聞社, 2009年7月22日。
- ・NY Green Fashion—パタゴニア, 生産過程での環境への影響—
<http://nygreenfashion.com/html/news/20080401.html> (2012年10月15日確認)。
- ・京都市環境局, 「家庭ごみ細組成調査報告書」, 2009年3月。
- ・(株)三菱総合研究所, 「平成13年度繊維産業活性化対策調査報告書」, 2002年。
- ・高月紘, 「繊維製品のしられざる環境負荷」, 廃棄物資源循環学会, 2011年3月。
- ・NY Green Fashion—環境に優しい服の素材—
<http://www.nygreenfashion.com/html/learn/fabric.html> (2012年10月15日確認)。
- ・NY Green Fashion—オーガニックコットン—
<http://www.nygreenfashion.com/html/learn/organiccotton.html> (2012年10月15日確認)。
- ・田中めぐみ, 「アメリカのグリーンファッション」, 廃棄物資源循環学会, 2011年3月。
- ・経済産業省製造産業局繊維課, 「繊維製品(衣料品)のLCA調査報告書」, 2009年。